

『あなたに神の恵みを』 (サムエル記第二 9章 1-13節) 2023.12.31.

<はじめに> 1年の締め括りの日です。様々な出来事と思いが去来する中には、しっくり納得いくことばかりではなく、「なぜ」「どうして」ということも多々あります。それは心配・不安ばかりとは限りません。私たちが思い描くよりも、遥かに超えたこともあり得ます。

I ダビデとメフィボシエテ

①イスラエル王国とダビデ

イスラエル王国初代の王サウルの息子ヨナタンとダビデは無二の親友で(Iサム 18:1-4)、娘ミカルの婿です。サウルは台頭するダビデを恐れて殺そうとしますが、サウルとヨナタンは隣国ペリシテとの戦いで戦死し、やがて王国はダビデを王と迎えます。

②王家の末裔・メフィボシエテ

ヨナタン戦死の報を受けて逃げる際、乳母が抱えていた 5歳のメフィボシエテを落として以来、両足が不自由となります(IIサム 4:4)。サウル王家とダビデとの王権争いの中、彼は、ヨルダン川東岸のロ・デバルのマキルの許に身を置き、人知れず生活しています。

③まだだれかいないか(1, 3)

王国の安定のために、前王朝を根絶やしにするのが常です。ダビデ王の言葉(1)は周囲に肅清を予感させます。王の前に引き出されるサウル家のしもべツィバも(2)、メフィボシエテも(6)「あなた様のしもべです」と名乗るのは、ダビデへの恐れと恭順を示すためです。

II 恵みを施したい

①ヨナタンのゆえに(1,7)

ダビデがサウル家の生き残りを探したのは、親友ヨナタンとの誓い(Iサム 20:15)を思い起こし、それを果たすためです。ダビデは主の御名によって誓ったこと(Iサム 20:42)に真実をもって尽くしたいと願い(1)、「神の恵みを施したい」(3)と神を引き合いに出したのです。

②死んだ犬のような私(8)

メフィボシエテは敵であった前王朝の末裔、しかも不自由な身です。対抗するつもりなど皆無だから隠遁していたのですが、王からの召還に覚悟して出かけます。彼が自分を「死んだ犬のような私」(8)と評した言葉に、どんな思いが込められていたのでしょうか。

③王の食卓で

彼の予想に反し、ダビデ王は彼に厚遇を与え、敵意ではなく好意と愛顧を示します。祖父サウルの所領を彼に返し、ツィバー一家に彼を支え労するよう命じ、メフィボシエテはエルサレムに住み、王の息子とともに王の食卓に待てるようになります。

III 神の恵みにあずかる

①敵であった者(ロマ 5:10)、死んだ者に(エペソ 2:4-5)

私たちがかつては、神を認めず自分勝手に生き、神に敵対して生きていました。それは、神の御前には罪と背きの中に死んでいたのです(ロマ 5:10)。しかし、あわれみと愛に富む神は、イエス・キリストの十字架のゆえに、恵みによって救われたのです(エペソ 2:4-5)。

②神から招かれて(マタイ 9:13、ヨハネ 10:3、黙示 3:20)

ダビデがメフィボシエテを召したから、彼は王の前に進み出られました。神はイエスを罪人を招くためにこの世に遣わされ(マタイ 9:13)、一人ひとりをその名を呼んで連れ出そうとされています(ヨハネ 10:3)。イエスの呼び掛けは今も続いています(黙示 3:20)。

③神の家族の一員へと(ヨハネ 1:12)

王の食卓に連なるのは、王家の一員・王子と同列の扱いです。神の恵みの招きを信じ受け入れた私たちも神の子となる特権が与えられ、神の家族に加えられます(ヨハネ 1:12)。食卓は黙食ではなく、養いとともに交わり・語らいがあります。それを味わっていますか。

<おわりに> 「私たちはみな、この方の満ち満ちた豊かさの中から、恵みの上にさらに恵みを受けた」(ヨハネ 1:16)のです。人間側からすれば驚きと不思議でしかありませんが、神が予め計画され、実行された御計画に過ぎません。これからも神の恵みを信頼し期待しましょう。(H.M.)